

東風野

すぐるの

8月号 (通巻828号)



郭公

小川玉泉

(名譽主宰)

四季咲きの庭の駒草梅雨に入る
間合よく郭公五たび筆を擱く
有線の曲は故郷梅雨の晴
呼び鈴は空耳なりし椎匂ふ
柚の花の香りにしばし車椅子
結び葉を洩るる日差しや厨窓

間合よく郭公五たび筆を擱く

良く晴れた五月十七日の午前七時十五分、机に向かっていると、紛れもなく郭公の声がする。我が家は片瀬山の西の裾にある。六十年近く住んでいるが、今まで一度も聞いたことはない。珍しさに、耳を傾けていると、縛麗な明るい声で、間合いよく「カッコウ」と五度鳴いた。この鳥は時鳥と同じく、自分では卵を温めることをしない。しかしからぬ鳥である。しかし綺麗な声であった。

虹

松本三千夫

押し移る雲の量感夏来る

埋もるるは石か仏か著莪の花

孫娘KCC (カピオラニ・コミュニティー・カレッジ) 卒業

レイ掛けて貰ふ空港薫風裡

孫卒業紺めガウンと角帽と

飴玉のレイも掛けられ孫卒業
屈みたる孫へレイ掛くアロハ着て
虹立つと妻呼べば虹薄れゆく
虹薄れゆくとき妻の肩へ手を
プールサイドデツキチェアーに脚投げて
ワイキキの波奪ひ合ひサーファーら
焰の舞ハワイの夏の夜を猛り
ハワイアン夜つびて流れ夜のプール

夏 燕

黒滝志麻子

(副主宰)

苗木市棒の如くに並べられ
クローバーに轍くつきり渡しまで
奥山のなほ奥恋ふる堇かな
御仏の厚き唇花曇
ふつくらと生まるる雲や花の山
入口は二本の丸太花の宴
茶島の起伏の影のまろさかな
たかななや少年馬にまたがりて
青田風日差しをふくみ畦わたる
農具屋の残る街道夏はじめ
魚河岸に鋸挽く音や夏燕
ぼうたんを咲かせて寺の抹茶かな

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

夏へ

松田泰子

神木をぐるぐる巻に芽吹く薫
落椿溜めて海鳴りとどく岩
ふるさとの小駅を好み春の月
たましひを抜かれてをりぬ桃日和
桜蕊降るや木馬は空を見ず
鳥雲に文鎮のせて置手紙
鯉のぼりいづくもひくき山ばかり
青年の胸へまともに青嵐
分けへだてなく墓に咲き苔の花
ひたすらに咲き十葉の愛されず

鳥雲に

森清堯

八橋の修復済みぬ蘆の角
朝よりあふるる鳥語八重桜
堰過ぐや組み直さるる花筏
寺庭の静かさもどり八重桜
投函の途端の悔いや鳥雲に
揺れ止んで次の風待ち藤の房
庫裡裏や実生の松の芯七つ
富士を据ゑ見渡すかぎり芝桜
春惜しむ富士を遠見の城の跡
富士山頂映せる池や花菖蒲



諸葛菜

森清信子

花筏の流れ重さう舫ひ船
幼稚園のフェンス新し花吹雪
白木蓮の咲き満ちてより風に倦む
山藤や杣道濡らし岩しづく
野の石とまがふ野仏諸葛菜
ふらここや子の足触るちぎれ雲
春暁の鹿の遠鳴く山家かな
富士映る水田明りや鯉幟
湖に迫り出して来ぬ若葉山
揚羽蝶光の襞ゆ生まれけり

雪柳

安齋久英

花ミモザ峽の流れは音立てて
夕星や風をいなせる雪柳
浜小屋の半ば朽ちたる諸葛菜
快速や路肩春塵巻き上げて
浮雲に語りかけをり紫木蓮
藤房を日照雨の叩く峠道
春泥やじぐざく歩き是非もなく
矢倉にも明暗ありぬ鐘おぼろ
草原に銀の風棲む茅花かな
青空へ一筆書きや春の雲

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



春満月 西川みほ

先ぎきに上ぐる感声桜狩
餌を競ふ鯉に怖けて残り鴨
春満月呼べば来さうな亡き親族
花冷や深く居るなり黒き鯉
廃校の庭の満開桜かな
雨二日晴れの三日や土筆伸ぶ
初蝶の惑へる美男仏かな

紅つつじ 吉田きみえ

躑躅燃え客なごまする無人駅
囀りや母の忌の墓去りがたし
水脈引くや沼の番の残り鴨
野のすみれ屈みて直す靴の紐
春の月上げ喪帰りの宵の口
帰宅して夕餉の一つ蜷汁
雨止みて明けの日に映ゆ藤の花

変声期 岡田史女

音信のなきはらからやげんげ草
父と子の寡黙なりけり昭和の日
新緑や林泉を縁どる石の数
変声期の子の黙深き五月かな
風出でて風をはなたぬ葭若葉
石組みの石のとりどり緑さす
トランペット聞こゆる丘や花うつぎ

青炎集

松本三千夫選



大網白里 岡井マスマ

藤沢 宮澤靖子

碁会所やたんぽぽ庭をひとり占め

竹籠の隙間まだまだ潮干狩

夏立つや廃家へパワーシャベル着く

手水舎の屋根を照らせり柿若葉

田の隅は筋不揃ひの早苗かな

薔薇の字のやうなる薔薇の開きけり

横浜 山口郁子

宮城 門間とし系

たんぽぽの綿毛何処へ風任せ

あるなしの風に弾むやだんご花

聖廟の庭の楷樹や新樹光

歩の止まり泰山木の花と香に

マロニエの花の変へたる街景色

筍掘り初体験の声頻り

ポケットへ江戸の古地図を花巡り

のどけしや余白の多き時刻表

単線の駅のベンチや春眠し

陽炎の彼方へ沈む一車両

自転車に乗りて湘南夏隣

裏庭を俄農婦や茄子の花

万緑の真つただ中や青郵碑

母を恋ふハチロー愛し嬰粟坊主

南部富士植田の小屋声高に

緑蔭にS席のあり車椅子

新緑の匂ふ葉ずれや子牛立つ

妣の牡丹花数去年の四半分

横浜

囀りの木となり昼の月淡し

折紙の鯉幟吊り曾孫祝ふ
老鶯の澄む声山の散歩道
薄明の裏山を駈けほととぎす
庭からの山並隠し柿若葉
前庭の一人に広き草むしり

田村加代

横浜

墓石に寄り添ふがごと母子草

芝桜丘の起伏をそのままに

淡あはと空に泛びて桐の花
万物にみなぎる力夏来る
真白なる卓布に替へぬ夏はじめ
音たてて剥くそら豆の青さかな

伊藤由良

横浜

首塚てふ祠にふりぬ紅枝垂

東風と来る同級会の案内状
濃淡も遅速も花の風情かな

シーソーの二人に降りぬ桜薬
禅寺にクルスの墓碑や松の花
髪切つて装ひかるき夏隣

遠藤清子

横浜

夕さりののの字のの字の紅枝垂

耳くすぐる京の言の葉花の雨
ティファニーの軒を窺ひ初つばめ
一山を統ぶる老鶯虚子の墓
薫風を畳む鎌倉路地小路
池の端を逆さ黄菖蒲ささら波

横浜

暮れ泥む街やほんのり花水木

カラオケの夫とデュエット春の宵
藤苑や香の濃淡をふりかぶり
透かしつつ磨くグラスや夏来る

外山生子

代掻きを終へし水面や雲走る
鉢植葱の豌豆を摘む日課かな

横浜

細小川途切れ途切れの蜷の道

リラ冷や港の見ゆる丘の径
絵タイルや漫ろ歩きにリラの冷
薄紅の今年最後の落花掃く
行く春や窓の灯明き巨船出づ
黒漆の花台に崩れ緋の牡丹

辻井ミナミ

耕 土 集

黒滝志麻子選



叔母見舞ふ笑みて食べよと柏餅

西東京 石井 雲雀

巻鮓の中は山海珍味詰

紅殻の街並続く薄暑なか

四代のうからやからやさくらんぼ

雷霆の家揺るがして明けにけり

豪快な夢に遊びて朝寝かな

リュックより摘草の香の厨かな

参道を進む花嫁白牡丹

いにしへの名も無き墓や苔の花

薄暗き政子の墓や瑠璃揚羽

横浜 東小蘭美千代

沿道つつじ満開日照雨

横浜 秋山 文子

列長き球場前や夏に入る

夏めくや鯉の口よる池の端

湯に浮かぶ菖蒲を笛にドレミかな

カーネーション真紅は母の好きな色

六甲の木叢眼下の春の昼

和泉 道草

濃山吹日当りて尚黄を増しぬ

根分けして隣家に分けな垣根越し

大櫂の葉擦れの音や夏来る

読み聞かせの間こゆる車内子供の日

満天星の花の雫や雨上がる

三鷹 小林 清彦

光陰の勿忘草に降り注ぎ

登校の銀輪眩し夏に入る

菖蒲湯や薪の匂ひの甦り

隣人の転居の謝辞や花は葉に

八十八夜疼き出したる旅ごころ

佐々木永子

行春や中空を突く烏帽子岩

風生まれくづれを誘ふ牡丹かな

干し上げしシート真白や夏初め

竹垣の続く民家や五月鯉